啓窓

－同窓会だより－

No. 88

（平成 21. 7. 17刊）

富山県立魚津高等学校同窓会

〒937-0041 富山県魚津市吉島945番地
TEL (0765) 22－0221
FAX (0765) 22－9970

同窓会ホームページ
http://www.nice-tv.jp/~gyokou/index.html
魚津高校ホームページ
http://www.uozu-h.tym.ed.jp/

「黒部の太陽」が呼び起こすもの

大田 弘

「黒部の太陽」が静かなブームとなっている。今から五十年前に黒部ダムの建設資材を運ぶため北アルプスを貫くトンネルを建設する話だ。「破砕帯」と言われる脆弱な地盤・大量の地下水に遭遇、一日に数センチしか掘れない状況となり、工事は立ち往生した。その後7ヶ月にも及ぶ死闘の末、八十mの破砕帯を突破、遂に〝抜けないトンネル〟は抜けた。

黒部ダムの建設が進められていた頃、宇奈月町の小学生だった私に祖母がこう言った。「あの木に柿が三つなっている。一つは食べて良い。もう一つは鳥にやる。そして最後の一つはそのままにして土にかえすんだよ。」

当時は何のことか良く判らなかったが「年寄りのことは素直に聴け！」と親父からいつも言われていたので、口答えはしなかった。祖母の言った「柿三つ」の話は今でも脳裏から離れないばかりか、むしろ歳を重ねるに連れて頭の中で益々大きくなっていく。

「市場原理」と「環境問題」…。生き方の根幹に関わる「課題」が今、我々に突きつけられている。人は「自分だけの力」で生きているのでもなければ、「今、現在だけ」を生きているのでもない。自然の恵みを享受し、その懐に抱かれながら、また、先人達が苦労して築き上げた財産を使わせてもらいながら、今を生きている。そういう「有り難さ」「お陰様での気持ち」を忘れてしまうと、「柿三つ」を全て自分だけで食べてしまいたくなる。「鳥に食べさせなければ」「土にかえさなければ」人間の一人勝ちになる。そして、その結末は明らかである。

我々は長い歴史の中でみれば〝一区間のランナー〟に過ぎない。だからこそ精一杯「襷の重み」を肩に感じ、「一生懸命、真面目」に走って次世代に襷を繋ぐ責任がある。また、お互いに見えない所、気付かない所で、助け合いながら「団体戦」で走っているのだ。「柿三つ」と「お陰様」、五十代半ばを過ぎ、ようやく祖母の話が少し理解できるようになってきた。

破砕帯の最前線で指揮をとり、映画「黒部の太陽」の主人公のモデルとなった笹島信義氏（入善町出身）は後に日本一のトンネル屋となるが、何故、そんなに一生懸命になれたのか？の問いに対し次のように答えている。

「金だけであんな所で仕事をやる人は居ない。そこには筋が一本通った気質があった。人のやれないことを己がやって見せるという、そんな意地とか根性があった」。さらに、「仕事が好きだから一生懸命になれた。嫌いなことは一分努力するのも嫌だが、好きなことは徹夜してでも時間を感じない。気が付いたら朝になっていた。好きなことには努力は惜しまないし、知恵も湧いてくる。そして執念、気迫が漲ってくる」と。

当時に比べ、技術は飛躍的に進歩し、暮らしも豊かになった。確かに物質的には豊かになったが、成長の主たる評価指標は依然として「経済」「物質」である。私は、心の豊かさ、つまり質の伴わない発展は「成長」ではなく、単なる「膨張」であると思う。「膨張」はいずれ「破裂」する。今、成長の定義が問われている。立ち止まって、「途中下車」、「行き先変更」を考えてみる時期に来ているのではないかと思う。

笹島氏は、「抜けないトンネルは無いが、皆で力を合わせて〝抜こうとしないとトンネルは抜けない〟」と言う。

「黒部の太陽」は、破砕帯突破時の先人達の覚悟・決意を通じて、我々現代人がどこかに置き去りにして来た「情熱」「志」をもう一度呼び起こすことを促しているのではないだろうか。今、日本の社会は「百年に一度の危機（破砕帯）」に遭遇していると言われているが、先人達の努力と生き様の軌跡を一度辿ってみれば、もっと心豊かに、もっと元気に、もっと素直に生きる術、生きる道が見つかるような気がしてならない。

株式会社 熊谷組 代表取締役社長
社団法人 日本土木工業協会 副会長
（魚高二十三回卒）

懐かしい魚津高校

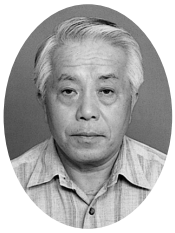
校長　筒井　慎一

教員として初めて教壇に立ったのが、魚津高校でした。一年生の授業を担当し、そんなに年の離れていない生徒たちと過ごす日々が実に楽しかったことをよく覚えています。もう三十数年も前のことであり、細かい記憶は曖昧なのですが、数学Ⅰをαとβに分けて、クラスによってそのいずれかを担当していたように思います。非常勤講師だったので、授業以外のことをほとんどしなくてもよいという気楽さが、楽しさにつながっていたのかもしれません。しかし、何よりも強く印象に残っているのは、どの生徒も食い入るように授業に参加してくれたことと、そして、できる生徒もそうでない生徒もよく質問に来てくれたことなどです。

二年後に教諭として魚津高校に戻ってきました。定時制（当時はまだ定時制が併置されていました）に勤務しながら、全日制を少しだけ応援する日々が二年間ありました。そして全日制勤務となり、担任として二周期（周期とは一年・二年・三年の担任を持ち上がった三年間の意味です）と三分の一を過ごしました。この間、数学の授業はもちろん、吹奏楽部の顧問や生徒会の顧問をしたときのことをよく思い出します。夏季休業中に、担任をしている全生徒の家庭訪問を実施しました。生徒の部屋で数学を教えているうちに、予定時間を大きく超えてしまい、次の予定時刻の生徒が迎えに来てくれる、ということなどがしばしばありました。温かい生徒たちに囲まれ、厳しさを忘れそうになったこともあったように思います。そして、吹奏楽部員たちには、定期演奏会などの際に、素人の私の指揮で思わず曲が止まりそうになる恐怖を経験させてしまいました。さらには、今は美しい中庭となっている場所に当時の生徒会室があり、顧問の私の顔を模した「筒石」なる丸石がいくつも積み上がっていたことを、ほのぼのと思い出します。また、若い私を常に包み込むように育てて下さった先輩の先生方を忘れられません。あらゆることを初歩から手取り足取り教えてくださいました。今日の私はこの魚津高校で作っていただいたものと、深く感謝しております。

現在、二十二年ぶりに校長として魚津高校に勤務することとなりました。十年一昔（ひとむかし）などという言い方からすれば、もはや二昔以上も前のことしか知らない私ですが、つい昔と今を較べてしまいます。当時の魚津高校の雰囲気はゆったりとして何に対しても大らかでした。同時に、どういう場合でも一本の筋道がきちんと通っていたように思います。言わば、「貫く棒の如き」精神が感じられ、一言で言えば実に健全な高校だと自負していました。もちろん、現在もそういう要素は色濃く残っていますが、若干色褪せているようにも感じます。またかつては、「いざ」というときの集中力の高さもなかなかのものがありました。これとて、まだ検証する機会に恵まれていないだけで、きっと現在も継承されているでしょう。もっとも、その「いざ」は、現在では何時どういう場合に発動されるのかが、私にはよく判りません。そういうわけで、現在の本校はどこといわず少しずつ小さくなり、そのことを「これでよし」としているように直観的には感じています。

日本の教育の成果が大きな経済発展につながり、現在はその翳りの部分に悩まされているような状況です。だからこそ、なぜ学ばねばならないのかが、改めて問われているように思えてなりません。少なくとも昭和の高度成長期までは、学ぶことへの熱心さがそのまま豊かな生き方に直結すると思えました。今、世界的な規模で俯瞰すれば、学びたくとも学べない境遇の若者で溢れているように思います。学ぶ以前に、食べることさえままならぬこどもたち、カラシニコフという機関銃を持たざるを得なかったこどもたち、そういう存在に思いを致して欲しいものです。「将来の希望は何か」と問われて「それまで生きていたい」と応える子どもに、心からの笑顔が戻ることを願わずにはいられません。この魚津高校で学ぶ生徒たちが、他を思い遣る想像力と自らが考える創造力を培い、健全な批判精神と逞しい自立心を育み、人類がどういう方向に進むべきかを口角泡を飛ばして語り合うような、そんな風景を思い浮かべています。今学んでいることがどの程度必要なことなのかが、自分で判断できるようになるまで、謙虚にすべてを必死に学び続けねばならないと確信します。そして、前庭の悠然としたヒマラヤ杉のように、いつまでも颯爽と立ち続けて欲しいものです。



四十七年振りの魚高にて

朝野　英明

昭和十七年生まれで、同三十六年に本校を卒業した私が昨年の四月より校務助手補助として働くことが許可された。四十七年振りの母校である。

このことを先輩に伝えたら、単なる偶然だと思うなよ、と戒めの言葉を貰った。

卒業から今日まで、私の履歴は一途であっという間だった。工業化学科を卒業して入社した日本製錬(株)で、サラリーマンとして生きる以上、高卒で満足出来ないことを、切実に教えて頂いた。

入社後五年の春、東京に出て、三万円前後の給与から六千円～八千円の授業料を納める苦学の機会を得た。幸いにも、寮と賄いがしっかりしていたので、辛い思いは無かった。逆に目標がはっきりしていたし、寮に夜学生が何人か居たので励みにもなり、充実した気持ちで卒論も終え、四年間で日本大学理工学部Ⅱ部工業化学科を卒業した。

四十五年二月より、希望した総合研究所金属研究室試験員となった。ここで、非鉄金属製錬の基礎研究に没頭出来る充実した時間を、時あたかも高度経済成長期の只中で、過ごすことができた。研究が良い結果になると、中規模試験から実生産へと継ぐ幸せもあった。

四十六年三月に結婚し、五十年と五十四年に一男一女を得た。四十六年秋よりゴルフを始め今日までも趣味として楽しんでいる。また、五十年ころから囲碁を教わり、これも現在に続く楽しみであり、パソコンで楽しんでいるが、ザル碁の領域を漂っている。

職場においては、能力開発の観点から品質管理手法について、初級、中級、上級に続いて実験計画法の実技までを習得し、命に応じて各種公的資格も取得出来た。そして入社時に考えもしなかった研究員を拝命した。五十九年四月から非専従の組合書記長となり、二期四年間労使関係と安全衛生の有り方を勉強させて貰った。

日鉱は、発祥が日立で日立製作所の親会社であり、鉱山から石油までの多岐に亘る研究を埼玉県の戸田市に六百名を超える陣容で切磋琢磨していた。

平成元年八月、終の棲家として入善に家を新築した。

平成二年六月に黒部に戻ることになり、ハイテク室で総研で手掛けていた亜鉛のドブ浸けメッキの基礎研究と中規模試験を行った。また、亜鉛事業からの撤退を決めた日鉱亜鉛(株)は、日鉱三日市リサイクル(株)となりシュレッダーダストを主とする産業廃棄物の焼却処理工場となった。ここでは、シュレッダーダストの焼却基礎試験を行い、産業廃棄物焼却施設技術管理者の資格も得た。リサイクルでは、

労働組合の委員長を一期二年務め、全国組織の大会出席や産業政策の実現のために幾度かの国会陳情も体験した。

平成十三年四月、黒部の敷地内にポリプロピレンの重合触媒を製造する東邦キャタリスト(株)が出来、そこへ出向することになった。茅ヶ崎工場で、六カ月の研修を受け、十月より新工場でチームリーダーとして排水処理と総務を担当してきた。この工場は完全オートメーション化され、TPM(トータル、プラント、メンテナンス)活動が徹底して行われており、専任講師による指導で全体のレベルアップが顕著であり企業は人なりを実践していた。

平行してISO・9001(標準化)取得の努力がなされて、見事認証を得、続いて同・14001(環境対応)にも全員でチャレンジし見事に認証を得ている。社員の年齢が若いのにやる気と充実ぶりには素晴らしいものがあった。私はここで定年を迎え、更に嘱託の二年半をここで過ごしサラリーマン生活を終えた。

その後、黒部商工会議所、社保庁、棚山GCでの勤務を体験して来た。孫に近い現役の彼等のためにやらなくてはいけないことは、より安全で、清潔で、勉学に打ち込める環境の維持と継続であり、安心の提供であろう。このために、自分に出来ることに100％傾注することが全てと心している。清潔で、健全で、明るい環境の中で、心開いた挨拶と礼節が守られ、人としての素養が育まれていく三年間であって欲しいし、これらをサポート出来る日々がうれしいし、正に頑張らねばである。

無限な可能性を秘め、これから自らの人生を切り開いていかなくてはいけない無垢で純な彼等彼女等に、長く生きてきた私から言えることは、経験からの一言〝両親から授かった貴重な命、未来志向をしっかり持って、今にベストを尽くして下さい〟だろうか。紅魂を燃やし切って、悔いの無い人生にして下さい。

本校で働ける時間は、私にとって健康の証でもある。まずは、卒業後四十八年目を大切な後輩達や懸命な先生方に尽くせることに感謝する日々である。

（魚高十三回卒）

私の「魚高祭」の思い出

村椿　勝

中学校で教壇に立つ身ですが、進路指導の際、私はいつも「高校は、その先の進路への単なる通過点に過ぎない」と生徒に言っています。どこの高校を卒業したからといって人生が決まる訳ではなく（高校がゴールである訳ではなく）、常によりよい自分を目指して努力を続ける必要があることは自明のことだからです。

では、その「通過点」にいた私がどんな高校生活を送っていたか。華々しい思い出はありませんが、教員になるという夢に向かって自分なりに努力し、そこそこの達成感と挫折も味わいました。当時の私は、人との関わり合いが苦手で、周囲の人たちの言動を見ながら自分の行動を決めるという消極的な高校生でした。生徒会誌の学級紹介では、「いやとはいえないやさしさが心にしみいる蝉の声、村椿」（「あゆみ三十六号」より）と紹介されました。目立たない私をうまく表現してくれている、と今でも感心する紹介文です。

以下、私の主観による曖昧な記憶を記したものなので、当時の関係者がこれを読み、事実と異なるところを見つけられたとしても、どうかご容赦願います。

私が二年生の時が、三年に一度の「魚高祭」に当たる年でした。私は、友人である当時の生徒会長に誘われるまま、例によって深く考えもせずに執行部入りを決断し、微力ながらその準備に携わっていました。

「文化祭である限りは文化的な企画でなければならない」というのが、生徒会長と魚高祭実行委員長の共通した考え方でした。ただ楽しければいいという安易な考えで、模擬店や劇等の案を提出したクラスは、実行委員会でことごとくその企画案を却下されていきました。会議は、常に険悪なムードが漂い、執行部と実行委員長に対する風当たりも強くなっていったのですが、生徒会長と実行委員長は屈せず、最後まで自分たちの考えを貫き通しました。魚高祭は、皆が満足できる内容に終わったと思っています。（ちなみに私たちのクラスは、最初からお化け屋敷をやりたかったのですが、第一企画案はもちろん却下。苦肉の策として「お化けの研究」と題した冊子の作成を加えることで、第二企画案がようやく認められました。）二人の生徒会活動に対する考え方は「過程を大切に」でした。よりよいものを求めてお互いに議論を尽くす。その過程での新たな発見に喜びを見出す。自分の信念を貫き通すこと、この容易ならざる作業をやり通した二人のことを思うと、今でも当時抱いた敬意の念がよみがえってきます。

「紅はわが心」、自分の信念に従い、真っ赤に燃える情熱を心にもって行動する魚高生諸君の活躍を期待します。

黒部市立鷹施中学校教諭（魚高四十回卒）

体操部の思い出

黒田富雄

高校時代の忘れられない思い出として、体操部での活動がある。

中学三年の頃は鉄棒や跳箱で遊んでいたが、高校に進学してからは、当時、教育大（現筑波大）に在学されていた先輩の本多氏（魚中四十七回卒）から熱心に指導して頂く様になった。春休み、夏休み、冬休みで帰郷されると、殆んど毎日、その頃、体育館として使われていた講堂で指導して頂いた。部員は、一年生の時は六名、二年生の時は十名であった。練習種目は、徒手（床）・跳箱・平行棒・鉄棒の四種目が中心で、時には吊環（つりわ）・鞍馬も指導して頂いた。

当時は現在の様な立派な器具がなく、平行棒は、土台を近所の鉄工所で作って頂き、バーは、製材所で削って頂いた杉の丸太を使った。又、吊環のリングは、鉄工所で作って頂いた鉄製のものであった。これらはすべて、先輩の力添えがあって出来たものである。

指導、練習の成果があって、第二回富山県体（昭和二十四年八月）で個人総合（徒手・跳箱・平行棒・鉄棒）三位に入賞し、第四回国体（神奈川）に出場。第三回富山県体では個人総合で優勝し、第五回国体（名古屋）に出場する事が出来た。

いざ国体に出場してみると、全国レベルには程遠く、残念な結果に終った。唯、参加する事に意義のあった国民体育大会であった。

しかし、長い人生を振り返ってみると、この経験が常に後押ししてくれた様に思っている。

大阪魚高会会長（魚高四回卒）

第３回富山県体で優勝した時の体操部員
前列中央が黒田さん、後列左端が本多さん

教育実習を通して

城山慶一

五月二十五日からの二週間、私は教育実習生として母校である魚津高校に戻ってきました。緊張と不安で一杯の状態でスタートした実習。しかし、学校は私達が通っていたときと変わらず〝魚高〟らしい雰囲気で迎えてくれたような気がして、幾分かはその懐かしさに心を和らげられ、また、新しく変わった面も見られて、新鮮さを感じるとともに期待も膨らみました。

教師という立場に居させてもらえるこの期間に、教員という仕事の大変さ、またその仕事の意味というものを実感し、垣間見ることができました。朝礼から始まる一日。授業は勿論のこと、学年の打ち合わせや生徒指導・生活指導、その他学校運営に関する校務などといったように学生時代には意識することもなかった教員の本当の存在というものを確と見ることができました。ただ、実際に授業やHRが任せられるようになると、その大変さを身を以て実感することとなり、先生方のフォローを借りざるを得ない状況になることも多々ありました。

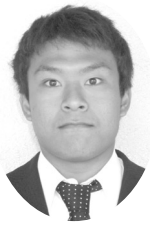
私は「教科・科目」を「理科・地学」でやらせて頂きました。現在開講されている学校が少ないこの「地学」で教壇に立って授業を行わせて頂くことは、私にとってとても嬉しいことでした。実習が始まる前は、授業を通して生徒達に地学の面白さ、大切さを伝えたいと考えていましたが、授業に出るようになると教えるべき内容をどのように分かりやすく伝えることができるかということに精一杯で、余談などを交える余裕はありませんでした。教えるべきことを教え、生徒達の興味を惹かせる話題を提供できる授業を行っている室井先生の姿は私にとってとても大きな存在に見えました。

また、生徒達とのコミュニケーションの大切さも教わりました。HRや授業前など普段の何気ない会話を通してコミュニケーションを図ることで、生徒の成長していく姿を見守ることができること、またその成長を手助けすることができることは教師としてのやりがいが感じられる瞬間の一つだと思います。生徒にとって教師という存在は大きなものであり、そのような仕事に従事するということは素晴らしいことであると思います。

振り返ってみるとあっという間に過ぎてしまった短い二週間でした。先生方や生徒達には貴重な時間を私達の実習に充てて頂き深く感謝致します。毎日が勉強であって次々に起こる変化に驚きを感じ、順応する能力を少しでも養っていこうと努力することに追われる日々でしたが、とても充実したものであったと思います。先生方にはたくさんのご指摘とご指導を頂き、実習中に学んだことをこの先自らの成長に結びつけていきたいと考えています。私の人生で教育実習というかけがえのない貴重な経験をさせて頂いたこの〝とき〟を大切にしたいと思います。

本当にありがとうございました。

（魚高五十七回卒）



教育実習を終えて

廣瀬俊輔

高校時代からの願いである母校での教育実習を終えました。三週間という期間は長いようで短く、あっという間に過ぎていきました。緊張して迎えた初日でしたが、昔と変わらない校舎のたたずまいと学校の雰囲気で私の肩の力が自然と抜けていきました。オリエンテーションでは校長先生の激励の言葉をいただき身の引き締まる思いで実習初日を終えました。二日目から本格的な実習が始まりました。実習が開始して日が浅いころは生徒たちの顔と名前がなかなか一致せず、また教壇に立つたびに汗が噴き出してきて緊張を隠せず生徒たちと思ったように接することができませんでした。自分の一挙手一投足が本当にこれでいいのかと不安が拭えないまま三週間が過ぎていったように感じます。

また、体育科の先生方には本当にお世話になりました。担当したクラス以外にも積極的に授業に参加させていただき様々な視点から「授業」というものを見ることができました。また指導する際のポイントや注意すべき点など多くのことを指導していただきました。また体育教官室に控えているときにも多くの声をかけていただき毎日先生方の温かいお気遣いのおかげで、三週間をとても良い雰囲気の中で過ごすことができました。

自分自身が生徒のときは全く気がつきませんでしたが、生徒たちは高校生活で大きく成長するものです。一年生はまだ中学生の名残りが残っていますが、学年が上がる毎に子供っぽさが消えて、三年生になるころには一人前の大人になっているように感じます。そうなるのも生徒自身の成長もあるでしょうが、先生方が目に見えないところで生徒たちを良い方向へと自然に導いておられるからであると思います。教師というものは、ただ授業を行えばいいというものではなく、授業以外にも校務や部活動などやらなければならないことはたくさんあります。その中でも生徒のことを常に考え、良い方向に進むように努力しておられる先生方を見て、感心させられてばかりでした。

実際に生徒を前にして教壇やグラウンドに立つと新しい発見の連続でした。教師という仕事にきまった理想の形というものはなく、絶えず変化し続ける生徒たちの動きやしぐさ、呼吸を感じ取りこちらがそれにあった理想の授業を展開していく、ということを身をもって体験しました。この母校での貴重な体験をこれからの自分の人生で必ず生かしていきます。最後になりましたが、実習を受け入れてくださった校長先生ならびに教務の方々、職員室や校内で優しく声をかけてくださった先生方、体育科の先生方、そして僕のつたない授業に真剣に耳を傾けてくださった生徒のみなさん、三週間という短い期間でしたが本当にお世話になりました。

（魚高五十八回卒）

平成二十一年度同窓会総会のご案内

◆日時／八月十四日（金）
十三時三十分～　総　会
十四時十分～　音楽会「二胡の調べ」
十五時三十分～　懇親会（会費　二、〇〇〇円）
◆場所／ホテル グランミラージュ

111周年記念式典

十月二日（金）

十三時三十分～　＊記念式典　於 魚津高校第一体育館
十四時四十分～　＊記念講演会　於 魚津高校第一体育館
十八時～　＊記念祝賀会　於 ホテル グランミラージュ